

コロナ後遺症患者専門外来に次々

2月中旬、「ながたクリニック」（加賀市山代温泉北部3丁目）に40代の女性が診察に訪れた。数週間前、クリニックの発熱外来を受診し、PCR検査で新型コロナウイルス感染が確認された女性だった。すでに感染症から回復しているが、頭痛やせき、嗅覚障害が残っていると訴え、こう語ったという。「どこにも受け入れてもらえなくて」



加賀・ながたクリニックが新設

当時、全国的に第3波が到来していた。「これは北陸でも同じような悩みを抱えた患者が増えるかもしれない」。診察した永田理希院長(50)はそう予感した。

患者がたくさんいるかもしれない」
患者が訪れ、皆、医療機関をたらい回しにされている現状を語った。

クリニックスは、2008年に開業した。感染症や外傷、小児科、漢方診療など幅広い分野の診察を行い、乳幼児から高齢者までの患者を受け入れてきたが、こんなことは初めてだった。

あると感じ、4月に「新型コロナウイルス感染症後遺症（ポスコロナ）外来」を、ホームページで告知した。

女性の来訪から約1カ月後、今度は20代の女性が来院した。コロナから回復したが、嗅覚障害や胸の痛みを訴えていた。その後も、同様の

「迷子になっている後遺症」として、思わぬ事態が起きると、北海道に愛知、京都、東京、千葉、沖縄……。デルタ

株が流行した第5波以降は、毎日のように後遺症患者が訪れるようになったのだ。
倦怠感や息苦しさ、せき、味覚や嗅覚の障害、脱毛、食欲不振、睡眠障害……。後遺症といっても程度も内容も様々だ。日常生活を送ることができないほどのケースもある。
ある大学生は「教科書を読んでも内容が頭に入らない」とクリニックを訪れた。プレイン・フォグ（脳の霧）と呼ばれる後遺症だった。学生は3カ月以上の休学を余儀なくされたという。現場仕事の男性はコロナ感染後、激しい

息切れに悩まされていた。その症状は長引き、半年間職場に復帰できていないという。

ただ、永田院長は「治療法に関して触れていない」と指摘する。クリニックには、それぞれ専門の医療機関で検査を受け、異常なしと判断された患者も多く訪れているという。

「迷子」に治療先 国など示して
かかりつけ医らは、後遺症に悩む患者にどう接し、専門医の受診をどのタイミングで勧めるべきか……。厚生労働省は、今月1日、後遺症対応に特化した手引きを公開した。
手引きでは、入院歴のあるコロナ患者の追跡調査の結果を公表。診断から6カ月が経った246人のうち、疲労感・倦怠感、息苦しさ、睡眠障害、思考力・集中力低下を訴える患者が全体の10%以上だったとしている。その上で、呼吸器や循環器、嗅覚・味覚、精神・神経など症状ごとに、診断する際の注意点や、患者への対応方法などをまと

「迷子」に治療先 国など示して

ただ、永田院長は「治療法に関して触れていない」と指摘する。クリニックには、それぞれ専門の医療機関で検査を受け、異常なしと判断された患者も多く訪れているという。

「迷子の患者をなくすには、どこに行けば後遺症を診て、治療してくれるのか、国や県が情報を集約して患者に見えるようにすべきだ」とより踏み込んだ対応を望んでいる。

どこも受け入れてくれない…



新型コロナウイルス後遺症治療に特化した「ポスコロナ外来」を設けた、ながたクリニック



専用入り口には、コロナ感染の疑いのある患者がPCR検査を受けられるアクリル板の設備を設けている。いずれも加賀市山代温泉北部3丁目

められた。また、筋力低下などを防ぐリハビリテーション法や、労災申請についても触れている。

(川辺真改)